



Title	<書評>Guillaume Collett, The Psychoanalysis of Sense : Deleuze and the Lacanian School
Author(s)	南, 匠真
Citation	共生学ジャーナル. 2020, 4, p. 210-217
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/75395
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

書評

Guillaume Collett

The Psychoanalysis of Sense: Deleuze and the Lacanian School

Edinburgh University Press, 2016, 258 頁

南匠真¹

Shoma MINAMI

1. はじめに

本書は University of Kent に提出された博士論文を基にして執筆された著者初の単著である。題名がドゥルーズの『意味の論理学』の一節からの引用であることから明らかなように、本書は『意味の論理学』について論じるものであり、特に「動的発生」の議論をラカン派との関係で読み直そうとすることがその主題である。これまで『意味の論理学』はドゥルーズ研究のなかでも扱われることが比較的少なかったが、そのような数少ない『意味の論理学』研究のなかでも動的発生の議論を中心に据えたものはほとんどないと言っていいだろう。動的発生とは『意味の論理学』の第 27 セリーから第 34 セリーまででなされる精神分析に強く依拠した議論であり、一言で言うならばそれは人間の身体（物体）からいかにして非物的なもの（言語）が生まれるかを論じるものであると言えるだろう。そして『意味の論理学』のこの個所はドゥルーズ哲学のなかでも重要な概念である「器官なき身体」の最初期の議論を形成しているということがしばしば言及されるが、その内実まで踏み込んで検討されることは少ない。器官なき身体が動的発生の議論に導入される際にその道具立てとなっているメラニー・クラインの精神分析理論の観点から動的発生の前半部分を読み解くという研究はいくつか見られるものの¹、器官なき身体を導出したその後の議論に言及するような研究は（おそらくその難解さのゆえに）ほとんど見られない。それゆえ動的発生を一貫してどのように理解すべきかはいまだに手つかずのままに残っていると見える。このような状況のなかで、本書は動的発生についての数少ない研究書であり、さらにクラインの精神分析理論を中心に据えるのではな

大阪大学大学院 人間科学研究科 共生の人間学 博士前期課程
(m.shomah8@gmail.com)

く、本書の副題が示す通り、ラカン派との関係から動的発生の全体に見通しを与えようとするものである。この点において本書は注目すべき著作である。

2. 全体の概観

本書は全5章からなり、章は下位の節によって構成されている。各章ではおおそ以下のような議論がなされている。

第1章はドゥルーズによる動的発生のためのラカン派理論の予備的考察に宛てられている。まずはラカンによるオイディプス・コンプレクスを巡る議論の整理をし(1.1)、ラカンの仕事を引き継いだセルジュ・ルクレールによる「文字」の理論を紹介し(1.2)、ルクレールの症例を通じて「母の欲望」と「父の名」の間の新たな名前としての *Poordjeli* の議論を展開し(1.3)、最後に70年代ラカンの議論とルクレールの議論を簡単に比較検討している(1.4)。

第2章は動的発生の第1段階、つまり「雑音」から「声」への移行について論じられる。まずは物体(身体)についてのアルトーの議論を紹介し、この議論が動的発生の第1段階を構成するメラニー・クラインの理論に言語の発生という観点を持ち込むためであるということが言われる(2.1)。そうして動的発生の始まりである妄想分裂態勢(2.2)と躁鬱態勢への移行(2.3)が論じられる。

第3章は本書のなかでも最長の章であり、声から「話すこと」(speech)に至るまでの長い道のりが記述される。まず Collett はルイス・キャロルの作品からドゥルーズが取り出した三つの「秘教的な語」(三つの総合)を導入し(3.1)、三つの総合の第一のものである接続的综合を部分対象に関連させて論じられる(3.2)。次に三つの総合の内の第2の連接的综合とそれによる全体的身体の形成について論じられる(3.3)。そして第1章に登場した *Poordjeli* が秘教的な語(連接的综合)に相当することを示し(3.4)、三つの総合における第3の離接的综合を体現する去勢が無意識と(前)意識の区別、物と語の二つのセリーの条件であり、第3の秘教的な語(離接的な秘教的な語)であって、それがどのように作用するかを論じる(3.6)。最後に、

以上の議論から Collett は、ドゥルーズがラカンの言う父の名とクラインの「良い対象」を結びつけようとしており、オイディプスの態勢における「良い対象」について根本的に新たな解釈を生み出そうとしていたと論じる(3.6)。

第4章では動的発生の第3段階、話すことから「動詞」への移行が論じられる。そこでは動的発生の到達点である「幻想」についての概観がなされ(4.1)、論理的命題の三つの次元とそれらが必ずや含んでしまう存在論的問題を通じて命題と幻想の繋がりを示された(4.2)後、以上の1・2節の議論を言語的な観点から捉えなおし、話すことに引き続く動詞の理論を展開する(4.3)。

第5章では動的発生の最終段階(この過程についてドゥルーズは『意味の論理学』で直接論じておらず、Collett 独自の議論であると考えられる)、動詞から「一義性」(univocity)への到達が様々なモチーフを通じて描き出される。まず Collett は言語と身体の「両義性」(equivocity)とそこから出現する一義性について「ユーモア」の観点から議論する(5.1)。次に「内在」と一義性の関係について「理念的なゲーム」を引き合いに出して論じる(5.2)。そして『意味の論理学』における言語と存在の関係を論じ、『哲学とは何か』の哲学・科学・芸術の三つ組に対応するような「意味の平面」が『意味の論理学』に認められるか検討し、それを通じて『意味の論理学』の理論構成を明らかにする(5.3)。最後にルイス・キャロルが作り出したアリスの物語のドゥルーズによる読解を基にして動的発生の全体図を描く(5.4)。

以上が本書のおおよその内容である。

3. G・Sartor による本書への批判

既に本書には Genevieve Sartor (2019) による非常に批判的な書評がある。批判は多岐にわたり、その多くが重要なものであるが、以下に彼女による批判の一部を要約して紹介する。

彼女が様々な批判を通じて最も主張したいのは次のことである。「彼の述べる主な主張の一つである「ドゥルーズがラカンの「オイディプス・コンプレクス」を再構成している」はミスリーディングである」(Sartor 2019:148)。

それは多くの理由に由来し、例えば「実際にはこの本は一つの例外〔それはルクレールである：評者注〕があるだけでフロイトとクラインに由来する精神分析的概念に専ら焦点を当てて」（Sartor 2019:148）おり、欲望と欲求の混同（Sartor 2019:149）やペニスとファルスの混同（Sartor 2019:149）といった「ラカンの概念に対する顕著な不誠実さが含まれて」（Sartor 2019:148）おり、またドゥルーズの議論はラカン以上にファルスに依拠している（Sartor 2019:159）からである。その他にはクライン理論の扱いを巡っていくつかの問題（「母親の身体に対する幼児の関係を敵対的としてのみ特徴付けている」（Sartor 2019:151）、クラインの償いの理論に関するドゥルーズの不注意を看過している（Sartor 2019:158））が指摘されている。

Sartor の批判は本書をラカニアン立場から読んだときに見えてくるものであり、「ドゥルーズとラカン派」という副題を掲げる本書にとって無視できるものではないだろう。またクラインの償いの理論に関しての批判はドゥルーズにまで届くものであり、動的発生の議論そのものに対する批判でもある。しかし Sartor が主に言及していた第 1 章から第 3 章までの範囲で批判を逃れている箇所もある。それは一つにはルクレールの文字の理論を応用した秘教的な語の議論である。本書でのルクレールの議論には Sartor も「Collett のテキストは身体と言語の関係のルクレール的な解釈に焦点を当てているならばより優れた研究であるだろう」（2019:150）と述べているのである。また本書の副題に（単に「ラカン」ではなく）「ラカン派」の語が採用されているのはラカンの一番弟子ともいえるルクレールへの参照が本書にとって大きな役割を果たしているからだとも考えることもできる。また Sartor の論考では動的発生の「雑音から一義性へ」という行論やそれに付随する議論についてほとんど言及されていない。それゆえ本稿では Collett 独自の動的発生の解釈、特にルクレールの文字の理論が重要な役割を果たす第 3 章第 4 節について以下で主に論じる。動的発生がラカン理論のドゥルーズによる再構築であるという論点は確かに問題含みかもしれないが、本書はそれだけに尽きるものではなく、様々な論点を含んでおり、その中で特にルクレールの理論から動的発生を捉えなおす Collett の試みは動的発生の解釈にどのような影響を与えるのか、それを本稿では明らかにしたい。

4. 文字の理論と「連接的総合」(conjunctive synthesis)

本節では動的発生での「声」から「話すこと」への移行についての Collett の見解(第3章)を検討する。そのためには前段階である「雑音」から「声」への移行を理解している必要がある。それはおおよそ次のような議論である。

ドゥルーズは動的発生の始めに物体のみが存在する次元(「深層」)を考え、それは物体を超越した理念的な対象の次元である「高所」と、深層にも高所にも属さないパラドクシカルな「出来事」あるいは「意味」の次元である「表面」とに対立している。動的発生は「事物の状態から出来事へ、混在から純粋な線へ、深層から表面の生産へと直接的に移行する」(Deleuze 1969:217/ドゥルーズ 2007:24)際の運動なのである。動的発生の最初の段階において「同時に舞台であり役者でありドラマである」(Deleuze 1969:218/ドゥルーズ 2007:25)のが幼児である。深層はまだ言葉を発することもできないような幼児の不安定な内的世界と同等であると考えられており、それゆえ幼児の発達は深層の運動それ自体と重ねあわされ、深層の運動はメラニー・クラインの精神分析理論と結びつけられる。クラインによると、生まれたての乳児は未発達な認知能力しかもっておらず、快原理に従って行動しているため(クライン 1983:56)、生の欲動と死の欲動(破壊欲動)に突き動かされており、例えば母親の乳房を、満足(快)を与える「良い」乳房と欲求不満(不快)を引き起こす「悪い」乳房とに分裂したものとして認識する(クライン 1985:4)。このような対象に対して幼児が行うのが「取り入れ」と「投射」であり(クライン 1985:4)、良い対象の取り入れと悪い対象の投射、外的な悪い対象との闘いが行われる。そのとき対象だけでなく乳児自身も未統合なバラバラの状態にあり、統合へ向かう傾向と解体の方向へ向かう傾向とが交互に生じる(クライン 1985:7)。しかし認知機能の高まりと、対象関係を「否認」し深層に完全性をもたらす器官なき身体の導入により乳房が一つの乳房でありそれが母親という全体的人物に属すものであることがわかると、幼児は悪い対象を攻撃しているつもりが良い対象でもあった母親を攻撃していたのではないかという罪悪感に駆られ、母親に対して償いの感情を抱くようになる。このような全体性を持つ対象は深層の部分対象と

は異なる次元（高所）に属した対象でありこれが真の意味での「良い対象」とであるとドゥルーズは論じる（部分対象であるということは悪い対象なのである）。しかしそれは幼児によって最初から（幼児によって）傷つけられており、それゆえその完全性を携えたまま現前することはありえない。こうして破壊欲動に駆り立てられて部分対象を破壊し、分割してきた幼児のこれまでの行いが良い対象によって罰せられることになる。以上が妄想分裂態勢（取り入れと投射による部分対象との闘い）から抑鬱態勢（高所の良い対象への償いの試み）への移行である。

このような変化の裏で言語的な発展もまたなされている。深層において音響的なものはまだ言語的な性質を獲得しておらず、幼児を攻撃する「雑音」でしかなかった。しかし良い対象が「深層の雑音から〈一つの声〉を引き出す」（Deleuze 1969:225/ドゥルーズ 2007:35）のである。それは「伝統を担う家族の声」（Deleuze 1969:225/ドゥルーズ 2007:36）であり、「完備な人格の情動の変化を表出する」（Deleuze 1969:225-226/ドゥルーズ 2007:36）が、まだ言語ではない。というのも、言語を習得していない子供からすれば家族の話す声は理解できないからである。家族の声の中で「子供はその名前でもって既に話題にされており、そこに子供は理解する前に入り込まなければならない」（Deleuze 1969:225/ドゥルーズ 2007:36）のである。声の出現と良い対象への償いの試みはどのような関係にあるのか。Collett の議論を参照するときである。

Collett はドゥルーズを引用しつつ、抑鬱態勢の到来によって「器官なき身体が「テリトリーに結び付き満足を体験する自我」〔(Deleuze 1969:229/ドゥルーズ 2007:42)：評者注〕に取って代わる」（Collett 2016:72）と述べる。そのような自我は「分裂態勢の取り入れられ投射された部分対象を今やそれらの「部分的表面」（乳房や後には指しゃぶり、あるいは口、排泄のための肛門）に投射された「イマージュ」として「知覚する」（Collett 2016:72）。そして「満足は現実の対象あるいはシミュラクルへの地帯のアクセスに基づくものとしての欲求の自己知覚というよりむしろ、イマージュあるいは満足の自己知覚に今や結び付いて」（Collett 2016:72）いる。それは「分割のプロセスに結び付くものとしての深層の破壊欲動のナルシシ的リビードへの変形」（Collett 2016:72）を意味しており、部分対象は「自己知覚あるいは

〔中略〕「イマージュ」へととって代えられる」(Collett 2016:72) のである。幼児の試みは、すでに分裂態勢の枠組みを抜け出しており、良い対象と自らの「部分的な性感帯あるいは部分的表面を一つの性感的身体あるいは「物理的表面」へと調整する」(Collett 2016:76) ことである。こうして、傷ついてしまった良い対象を修復するために、破壊欲動から逃れた「諸自我あるいは部分的諸表面は(抑鬱的に) 超自我あるいは「声」または(躁的に) それらの局所的で部分的な自我-イダ的イマージュに同一化するという二者択一を与えられる」(Collett 2016:72) が、どちらもうまくいかない。ここで重要な役割を果たすのが「性器帯に固有のイマージュとしてのファルス」(Collett 2016:74) である。ドゥルーズによればそれは性器という「器官へのナルシス的な過剰備給」(Deleuze 1969:237/ドゥルーズ 2007:53) であり、「他のすべての地帯の総合を操作するための条件」(Deleuze 1969:237/ドゥルーズ 2007:53) である。このファルスによって幼児は良い対象と自らの身体とをそれぞれ修復しようとするのだが、それはいかにしてなされるのか。Collettによればこの過程には「秘教的な語」の構築が不可欠である。

「ドゥルーズは文字を音素、ファルスとして働く秘教的な語を形態素と考えている」と Collett は言う (2016:92)。ここで「文字」とはルクレールの用語である。この文脈では「文字あるいは〔中略〕性感帯を特徴付ける強度の差異に関連した音素的差異」は、「地帯」に限界を「引き」、性感帯のもとにその対応するイメージを包摂する」(Collett 2016:78) ものであり、「声から抜き出された音素は〔中略〕ファルスの中心化から独立して地帯に初めから記入されている」(Collett 2016:78) ものと考えられている。なぜ音素が地帯に記入されるのかというと、「幼児の良い対象としての声への性感的な中心化が専らイントネーションにおける声の音素的な「表出」によって媒介されている」(Collett 2016:79) からである。こうして身体のある地帯と音素は結びつくことになり、秘教的な語、つまり形態素の形成と共に一つの全体へと統合されようとする。というのも、ドゥルーズが言うように (Collett もこれに同意するが) 「音素そのものは複数の弁別特徴や複数の示差的関係の束」(Deleuze 1969:269/ドゥルーズ 2007:98) だからである。さらに言えば、「形態素がそれらの特徴に、その中でそれらの特徴が示差的な特徴として分節されうるような構成的形式を与える」(Collett 2016:95) からという意味

で、「秘教的な語のおかげで音素のとしての文字はまさに「分節の要素」となり互いに示差的である関係に入り始める」(Collett 2016:95)のである。そしてそのような形式を可能にしているのは「音素を駆り立てる共有された償い-召喚的計画」(Collett 2016:95)であると考えられる。こうして秘教的な語が音素の集合であると考えられるように、それらに結び付く身体の表面もまた一つの集合になるのである。

ルクレールを応用した以上のような議論は、いかにしてファルスが表面を調整して一つの身体的表面を作り上げようとするのかというドゥルーズの議論に対する疑問に答えるだけではなく、動的発生の議論を言語の発生という哲学的探求として見たときに、言語の発生の場面をドゥルーズ以上に鮮明に描いてくれるものである。このような意味で本書第3章の議論は優れたものであると言えるだろう。

参考文献

Deleuze, Gilles. 1969. *Logique du sens*, Paris: Éditions de Minuit.

Sartor, Genevieve. 2019. Guillaume Collett (2016) The Psychoanalysis of Sense: Deleuze and the Lacanian School. In Ian Buchanan(ed.). *Deleuze and Guattari Studies* 13(1): pp.147–161.

ドゥルーズ、ジル 2007『意味の論理学』(下) 小泉義之訳、東京：河出書房新社。

クライン、メラニー 1985「分裂的機制についての覚書」狩野力八郎・渡辺明子・相田信男訳、小此木啓吾・岩崎徹也編『メラニー・クライン著作集』第4巻、pp.3-33、誠信書房。

クライン、メラニー 1983「離乳」三月田洋一訳、小此木啓吾・岩崎徹也編『メラニー・クライン著作集』第3巻、pp.21-55、誠信書房。

¹ 小倉 拓也 2018 『カオスに抗する闘い ドゥルーズ・精神分析・現象学』人文書院などが挙げられる。